

刊 行 の 辞

四国遍路は古代に始まり現代まで続いている巡礼である。いまでは四国を代表する文化遺産となっており、毎年多くの人々が遍路のため四国を訪れ、四国遍路への関心は年々高まっている。とりわけ、2014年の四国霊場開創1200年、2015年4月の日本遺産への認定により、四国遍路は全国的な注目を集めつつある。また、2010年3月に「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会が四国4県と関係57市町村、大学、霊場会、経済団体などによって設立されるなど、いま四国では官民あげて「四国八十八箇所霊場と遍路道」の世界遺産登録への取り組みも推進されている。

このように、四国遍路は地域の貴重な文化遺産であり、社会の関心もきわめて高いのだが、四国遍路研究を専門とする研究者の数は少なく、学術的な研究はあまり進んでいないのが現状である。また、サンティアゴ巡礼、メッカ巡礼といった世界の巡礼との国際比較研究もほとんどなされてこなかった。

したがって、四国遍路に対する社会の関心に応えるためにも、国際的な視野から四国遍路研究を進め、その全体像を解明することが、地域の学術拠点である大学に課せられた責務であるといえよう。

愛媛大学法文学部では、法文学部と教育学部の歴史学・文学・社会学などの教員を中心に愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会が結成され、四国遍路の古代から現代に至る実態を学際的に解明するとともに、日本・世界各地の巡礼との国内・国際比較研究を行うことを目的として共同研究を進めてきた。この研究会が発足したのは2000年の夏で、2003年からは毎年秋に公開シンポジウム・研究集会等を開催し、学際的共同研究を続けた。

こうした共同研究の成果はその都度プロシーディングズ等にまとめており、その数は20冊を超えている。また、学術論文集として『四国遍路と世界の巡礼』（法蔵館、2007年）、『巡礼の歴史と現在—四国遍路と世界の巡礼—』（岩田書院、2013年）を刊行した。

このように、愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会は、10年以上にわたり国際的な視野から四国遍路の学際的共同研究を進め、多くの成果をあげた。また、「歩き遍路」授業や四国遍路の世界遺産登録など、教育や地域貢献にも積極的に努めてきた。こうした四国遍路と世界の巡礼に関する長期にわたる研究活動・組織はほかに類例のないものであり、いまや全国で唯一の研究拠点となっている。こうしたことから、2015年4月に法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センターが設置され、四国遍路と世界の巡礼研究のさらなる充実が図られることになった。

本センターは、四国遍路の歴史や現代遍路の多様な実態を学際的に解明し、世界各地の巡礼との国際比較研究を行うことを目的とし、また研究成果を教育に生かすとともに、世界遺産登録など地域社会・地域文化の発展に学術面から貢献することを目指している。

本誌は、これまで毎年刊行してきたプロシーディングズにかわり、本研究センターの研究成果をまとめ、周知するために刊行するものである。シンポジウム、講演会、研究会、研究集会などの報告の他に、センター関係者の論文や調査報告、資料紹介などさまざまな研究成果を収載する予定である。内容について忌憚のないご意見・ご批判を乞うとともに、本誌により四国遍路と世界の巡礼研究がますます進展することを願う次第である。

法文学部附属 四国遍路・世界の巡礼研究センター長
寺内 浩